

2021.9. 21 <計2枚>

京都大学記者クラブ加盟社 各位

立命館大学広報課

2021年度 国際言語文化研究所 連続講座「病、との接触－災厄を記憶する」

日 時:2021年10月8日・15日・22日・29日(毎週金曜日) 17:00~19:00

開催方法:オンライン(Zoom ウェビナー)

立命館大学国際言語文化研究所(※)は、全4回の連続講座「病、との接触－災厄を記憶する」をオンラインで開催いたします。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的大流行は、今なお人類に猛威を振るい、社会を混乱に陥らせています。本講座では、かつての戦争や約100年前のスペイン風邪、さらには飢饉や原発事故によって生じた非日常的状況と往時の人々の生活を、コロナ禍の現在に引き寄せながら、今を生きる私たちの「生、」を改めて考え、現在の混沌を抜け出す一縷の道を模索していきます。

※国際言語文化研究所について

新しい時代にふさわしい共同性を思考するという命題を、言語と文化という側面から追求していくことを目的としています。国民国家の再検討、グローバリゼーション批判、ジェンダー編成の考察、デァスポラとしての移民の追跡、日本研究所における視覚性の問題、あらたな社会構造における矛盾など、多くの課題をプロジェクト研究として取り上げ、シンポジウム、出版物などで国際的に展開・発信しています。

記

日 時 : 2021年10月8日(金)・15日(金)・22日(金)・29日(金) 17:00~19:00

開催方法 : オンライン(Zoom ウェビナー)

内 容 : 別紙をご覧ください。

参加方法 : <http://www.ritsumei.ac.jp/research/iilcs/event/redirect.html/>
当日、上記 URL よりご参加いただけます。

参加費 : 無料・事前予約不要

主 催 : 立命館大学国際言語文化研究所

そ の 他 : 手話通訳のご用意があります。

以上

●取材・内容についてのお問い合わせ先

立命館大学国際言語文化研究所 担当:乾・木下・眞船

TEL.075-465-8164

<http://www.ritsumei.ac.jp/research/iilcs/>

【第1回】10月8日「戦争が残した傷・病」

戦争は、人々に深刻な傷・病を与えた。その痛みは、今なお受傷者の心身を苛んでいる。本講座では、戦争による惨禍の記憶を、傷痍軍人の戦争体験記、並びに沖縄作家たちの文学表現から浮上させ、戦争が残した傷・病にいかに向き合うことができるかを考える。

発表1:「眼前の〈トラウマ〉に向けて—『戦後50年』の『沖縄』文学から」 栗山 雄佑(立命館大学)

発表2:「『傷痍軍人』の体験記にみる戦争の傷痕」 松田 英里(早稲田大学本庄高等学院)

コーディネーター・司会:内藤由直(立命館大学)

【第2回】10月15日「カナダの日本人移民社会における『病』—スペイン風邪・結核との闘い」

1918~20年にスペイン風邪、1932~1942年にはコレラが世界を襲った。2つの病魔はカナダ・バンクーバーにも来襲し、当時の日本人移民にも多くの罹患者がみられた。すでに2世も誕生していた日本人社会は、いかに病魔に立ち向かったのだろうか。日本語新聞をはじめとするさまざまな史料から、日本人社会の「病」への対応について考察する。

発表1:「バンクーバーにおける日本人社会とスペイン風邪—日本語新聞『大陸日報』からの分析—」

河原 典史(立命館大学)

発表2:「バンクーバーの日本人健康相談所と結核予防への取り組み(1932~1942年)」

坂口 満宏(京都女子大学)

コメンテーター・司会:志賀 恭子(同志社女子大学)

コーディネーター:河原 典史(立命館大学)

【第3回】10月22日「災厄を伝える民うた・民がたり—震災・戦争・パンデミック—」

太古の昔より、さまざまな災厄に直面した時、人々(民)はともに歌い語ることで、その理不尽な出来事を受け止め、乗り越え、さらにこれを他の社会や次の世代へと伝えようとしてきた。本講座では、このような民のうたやかたりの機能について、実演を交えながら考える。

発表1:「戦争・飢饉・疫病を伝える子守唄・わらべうた」 鶴野 祐介(立命館大学)

発表2:「災厄を伝える民がたり」 川島 秀一(元東北大学教授、日本民俗学会会長)

昔語り:「災厄を伝える遠野の民がたり」 大平 悦子(語り部)

コーディネーター・司会:鶴野 祐介(立命館大学)

【第4回】10月29日「原発禍からコロナ禍へ—連鎖するカタストロフィを考える」

原発禍からコロナ禍へ、いまやカタストロフィはサイクル化し、災禍はわれわれの文明に内在するものととらえざるをえなくなっている。この現実を前に、『脱原発の哲学』(田口)、『イタリアン・セオリーの現在』(テッロージ)、『野蠻の言説』(中村)の著者とともに思想を停滞から解き放ちたい。

発表1:「〈人間〉を超え出づるものたちに関する二、三の注釈—核と疫病を手がかりとして」

田口 卓臣(中央大学)

発表2:「パンデミックから災害まで:人類のリスクを哲学する」 ロベルト・テッロージ(立命館大学)

コメンテーター:中村 隆之(早稲田大学)

コーディネーター・司会:土肥 秀行(立命館大学)